



広川町フォトブック



Hirokawa Town  
PhotoBook



伝えたい場所がある。  
教えたい人がいる。

あえて人に言うほどのことではないけれど、  
広川町に住む人が知る  
お気に入りの場所。  
有名な人。

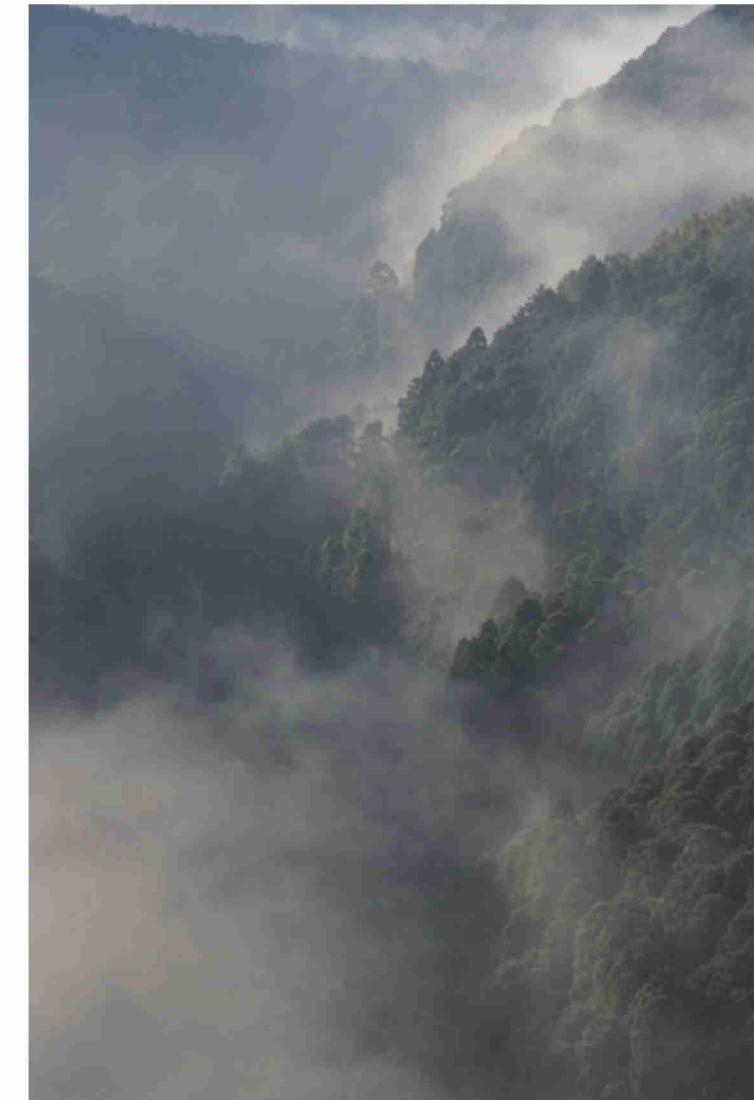
そんな広川町の魅力を  
町のみなさんに公募し、  
フォトブックというカタチにしてみました。  
町の人たちから寄せられた  
あたたかな「想い」が詰まっています。



■撮影場所 逆瀬ゴットン館

## 「黄金の水車」

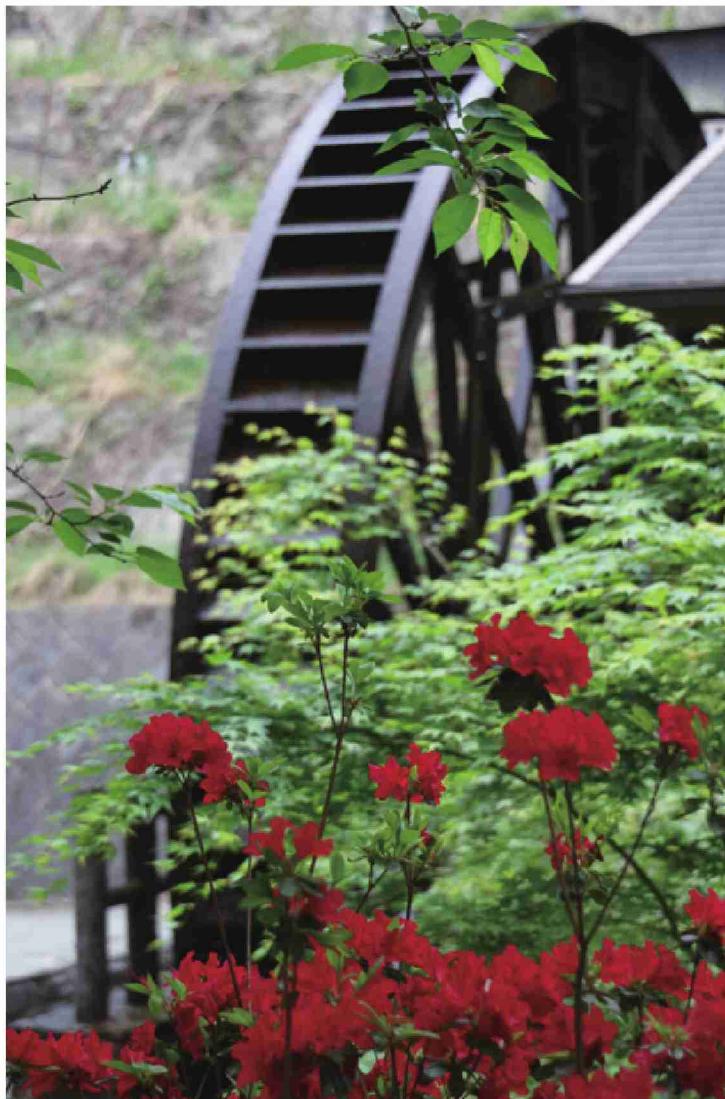
逆瀬ゴットン館の水車と椿の花が、オレンジ色の街灯の灯りで  
黄色く光っていました。超低速シャッターで撮ったところ黄金色  
の水車のように撮ることが出来ました。



■撮影場所 小椎尾区場平

## 「雲海」

広川町の東北部の位置から八女市・旧黒木町の方面に雲海が  
発生したので撮影したもの。まるで墨絵を見ているようでした。



■撮影場所 逆瀬ゴットン館

## 「水車とツツジ」

低速で回転するゴットン水車の傍らで咲き誇るツツジを添景にして切り取りました。



■撮影場所 逆瀬ゴットン館から逆瀬谷薬師堂の方に少し上った道路の斜面

## 「桜と菜の花」

町道薬師堂線の斜面に満開の桜と菜の花が同時期に咲き、屏風に描かれた絵画のようでした。



■撮影場所 逆瀬ゴットン館から逆瀬谷薬師堂の方に上がった最初の大きなカーブ

## 「満開の桜」

満開の桜の枝が道路の左右から生い茂り、桜の中を通り抜ける感じです。



■撮影場所 逆瀬ゴットン館

## 「静寂」

気温が氷点下の時期に撮影したもので、水車のしぶきでツララが出来、前夜から雪も降りゴットン館周辺の深々としている情景を撮影しました。

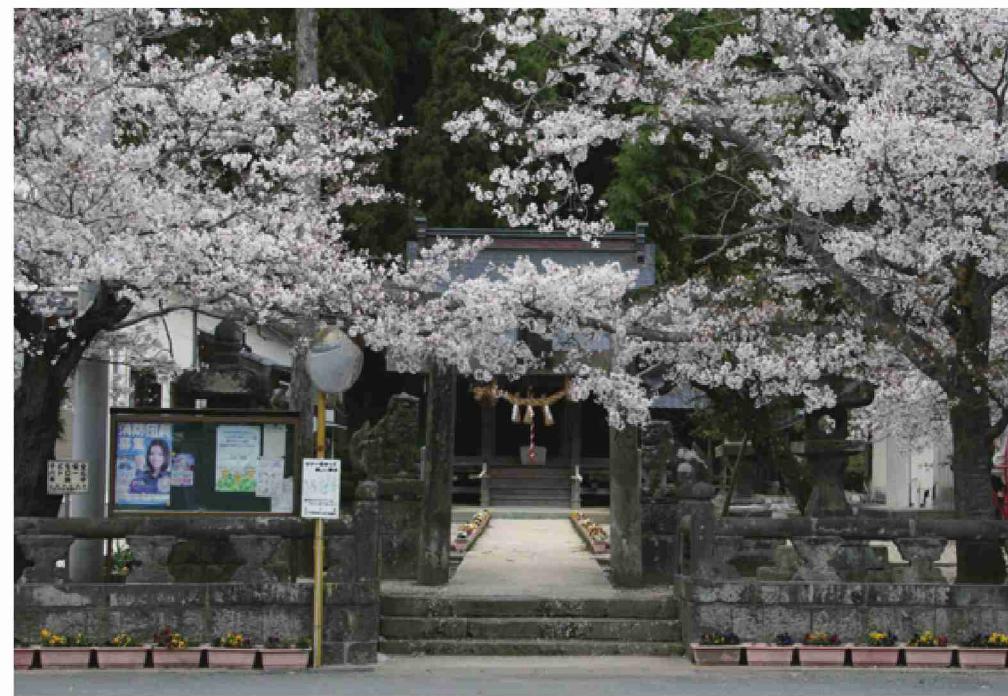


■撮影場所 広川インターチェンジと広川サービスエリア(下り線)



■撮影場所 吉里区公民館付近

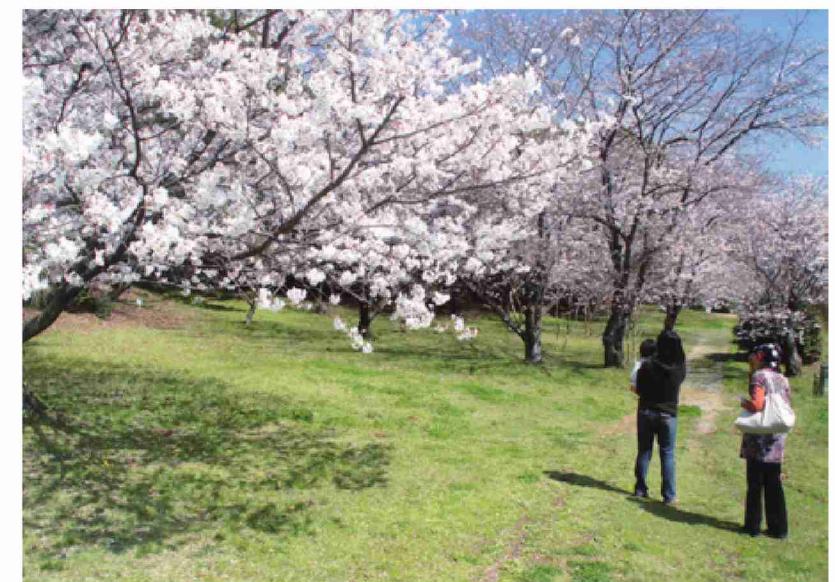
正面のアクセサリーがレトロな  
感じで面白い・かわいい。  
85年前のもの。  
今は防災倉庫・昔はポンプが  
ありました。今は土のうや  
リアカーが入っています。  
煉瓦は昔のまま。春は  
菜の花が周りに咲き誇ります。



■撮影場所 内田天満宮

## 「広川町古墳公園」

石人山古墳があり、桜の時期  
になると大勢の人が訪れる公  
園です。  
公園内には資料館もあり、秋に  
は古墳まつりも開催されます。



■撮影場所 石人山・弘化谷古墳公園



■撮影場所 広川ダム



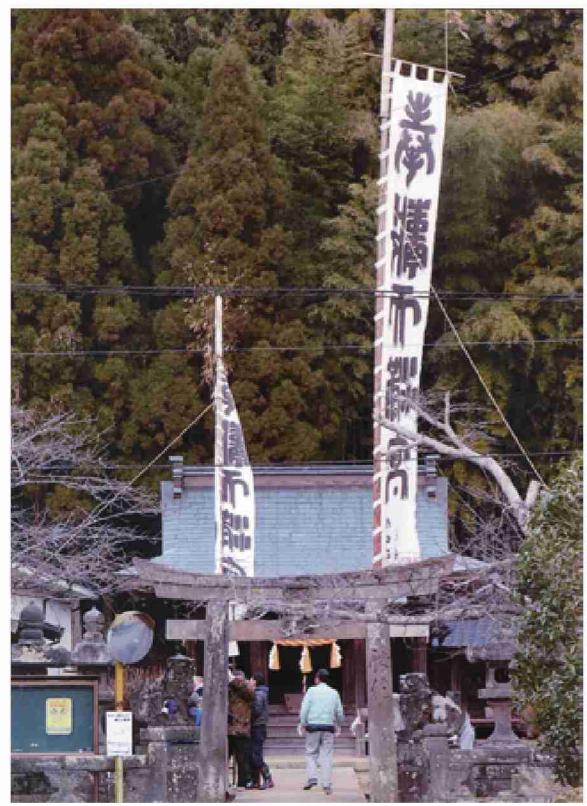
■撮影場所 逆瀬谷区のお宮

小さいころからよく遊んだ場所 この地域の氏神さま。

年に1回、12月15日にみんなで寄ってお祓いなどをします。

遠方から来られるようなところではないですが、

紅葉の時なんかはライトアップとかしたらきれいだろうなあ。



## 「内田天満宮の幟」

明治時代から続いた内田天満宮の幟。  
写真の幟は20年ほど前に2mぐらい短くしたもの。  
しかしこの立派な幟も立て倒しの人手が足りない  
ことを理由に平成29年の正月を最後に幕を閉じ  
ました。

■撮影場所 内田天満宮



■撮影場所 逆瀬谷区旧共同風呂



■撮影場所 小椎尾区 段々畑



■撮影場所 一條花街道(コスモスロード)



■撮影場所 逆瀬谷区のお宮



■撮影場所 逆瀬ゴットン館付近のアジサイロード

## 「篠原神社奉納相撲大会」

かつての筑後地区三大相撲(注)

の1つで、約40年前に復活し、毎年小学生を中心に、八女市、八女郡から約100人の豆力士が参加し、勝負を競い合って大会を盛り上げてきました。

平成28年は9月11日(日曜日)に、実施しました。会場の篠原神社は、江戸時代享保8年から、雨乞神社として、八女地域の信仰を集め「必ず靈験あり」と参拝者が多かったと言われています。

(注) (1)八女市祈穀院 五靈社、(2)筑後市秋葉神社、(3)広川町篠原神社。現在では、(3)の奉納相撲だけが継続中です。



## せいらくちゃやすさのおじんじゃししまい 「清楽茶屋素盞鳴神社獅子舞」

「広川町指定文化財第2号 民俗文化財(無形)」



神社記録帳によれば、無病息災・悪病退除の行事として夏越しの祭りの翌日に、若者が獅子舞をして回巡したという記録があります。古い獅子頭には慶応三年云々の墨書きが見られます。現在も獅子舞保存会により祭礼時には獅子舞の奉納が行われています。



## 「広川まつり」

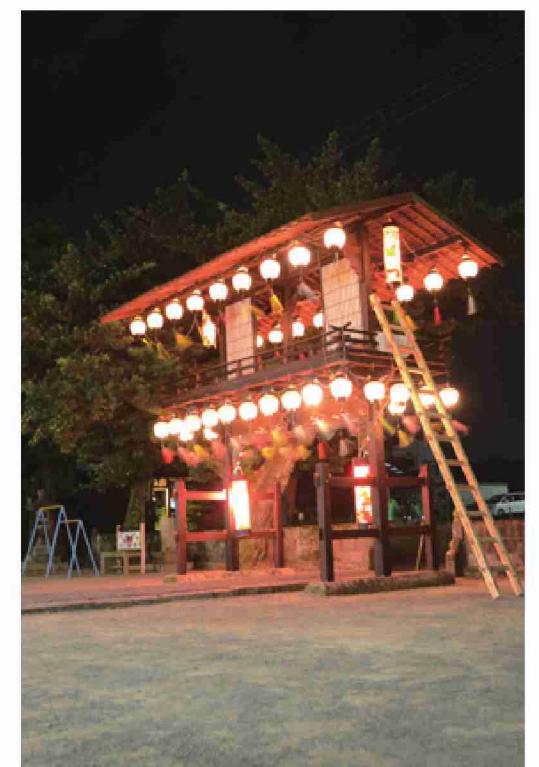
町の名前がついた祭りで、毎年10月に前夜祭と本祭の2日間開催されます。多彩なゲストが祭りを盛り上げ、たくさんの人が訪れます。

## ますなが ぎおんじんじゃ ちょうぎり 「増永 祇園神社 丁切」

「広川町指定文化財第1号 民俗文化財(無形)」

増永区の祇園祭のときに立てられる楼門状の建築物のことです。1本の釘も使わずに組み立てられ、飾り提灯が下げられます。

丁切は町切とも書かれ、かつては町内各所に見られましたが、現在は増永区にのみ残ります。





—久留米絣 手織り職人—久保田 東さん

# 織貫一筋64年

## 土壁がはがれた仕事場。

その隙間から風が入り込み、冷気が部屋全体を覆っていた。久保田東さんは広川で手織りで織貫を行う、ただ一人の職人。東さんは冷たい手を震わせながらぱつりぱつりと言葉を紡ぐ。「手が冷たいけど、うまくいかん(笑)」ずーっと動かさんかつたけん、糸もうまく伸びんとですよ。私は機屋さんからのオーダーでタテ糸を括る作業をしようて、いろんな柄の注文がくるけん、計算して設計図を書いて括る。言われた柄にせないかんけん、出来上がりの想像が大切。昔は男性が多くて括りは男性の仕事やつたんよ。学校をでて、親の代からずーっと括りをやつてる。昭和30年ごろまでは10台ぐらいの機械が並んどうつたけどねえ…これからのことを考え、向こう何年先のも織つとるんよ。いくつまで生きるかわからんけん(笑)】

そう言いながら織り機操る東さん。カタンカタンと一定のリズムで織られ続ける括りは、東さんの人生そのものである。



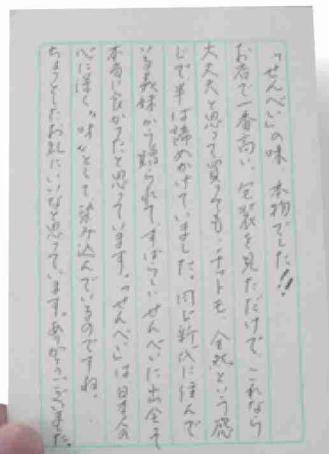
## 美味しいせんべいの理由

—久保田せんべい本舗—久保田 隆一さん  
久保田みよ子さん



### いい匂いがする。

人通りが少ない吉里区の脇道を歩く最中、甘い匂いに足を止める。匂いのする場所を特定し、誘われるようドアに手をかけると、このお店の主人である久保田隆一さん、久保田みよ子さん夫妻が出迎えてくれた。「せんべいは8種類あり、生地や型を変えてます。水は使わず、卵とバターの素材を存分に生かし、じっくり弱火で温めることで噛みはじめはカリッと、食べ始めたらサクッと口の中で溶ける。手作りが珍しくなったまでも、この触感を守るためには、材料と作り方にこだわっています。遠方からも買いに来て下さる方がいて嬉しい。直接声が聴けるから」と語ってくれた。二人にとつて、直筆のお礼状は宝物である。



注釈:せんべいの焼き印もオリジナルで作れる。(要相談)

# 親子三代農業

## 一年目

— いちご農家 — 雨森涼太さん

ビニールハウスの中に足を踏み入れてみると、見渡す限りの苺畠。

この畠の持ち主である雨森涼太さんは祖父・父と親子三代で農業を営んでいる。二年前まで福祉施設で働いたたけど、継続こうと思つたきっかけというよりも、中学校、高校、大学とあがるにつれて、跡を継ぎたいと思う気持ちが大きくなつた。

家族に跡継ぎのことを言われたことはなかですが、祖父祖母元気な内に継いだ方が色々と教えてもらえたけんですね。

子供の頃は手伝いとかしょって、めんどくせーっちは思つたんですけどね。(笑)パック詰めもするとですが、サイズが何種類もあって難しかりも、中学校、高校、大学とあがるにつれて、跡を継ぎたいと思う気持ちが大きくなつた。

名おるとですよ。福岡県内の博多あまおうを10分の1作つとつてから、が一番多か地域ですよ。

やけん。(笑)」と新鮮な音を立てて苺を摘み取る雨森さん。この豆知識も雨森さんからの情報だが博多あまおうの品種だけは切ると中も赤いが、他の苺の品種は切ると中は白いとのこと。

みなさんも是非食べ比べをしにきてみては?



# 難しきと思ひながら 考えてつくるものは 面白い。

— 久留米絣 織職人 — 富久洋さん

「機織りは継がない」富久洋さんにとって子供の頃から機織りは日常の光景であり、また工場は毎日遊び場だった。だからこそ、そう思うことはすごく自然なことだったのかも知れない。

高校は工業デザインを学ぶためデザイン科に進み、その道への就職を考えた。しかし、両親の希望もあり大学へ進学。そこで織を専攻する教授との出会いが、富久さんを紡と

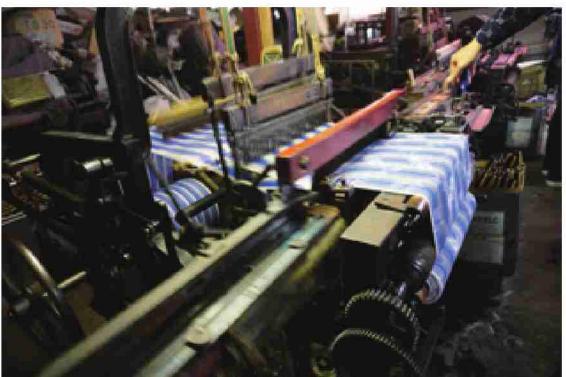
真剣に向き合わせるきっかけとなつた。「最初はいつ辞めようかと思つた。でも、手仕事をする人間は途中で放り出すのが嫌なんですよ。一つの柄を納品するまでは続けよう。その後繰り返しで辞めるタイミングがなくなつた：（笑）

仕事は基本断らない。富久さんに持つていたら何でもつくってくれる、これは富久さんじやないと出来ないからお願いします、と言われた柄を、

難しいと思いながらも、考えてつくりあげていくことが面白いんです。そして機織りで織りはじめて、あのスピードで段々と柄が出来ていくのを、じつと見てるんです。

柄が思った通りに5分間で織られていく。その瞬間が好き。

辞められないのではなく、辞めれないんです。」



# 形にしてきた。失敗を繰り返し、学んで

— 天然藍染 草木染め職人 — 山村省二さん

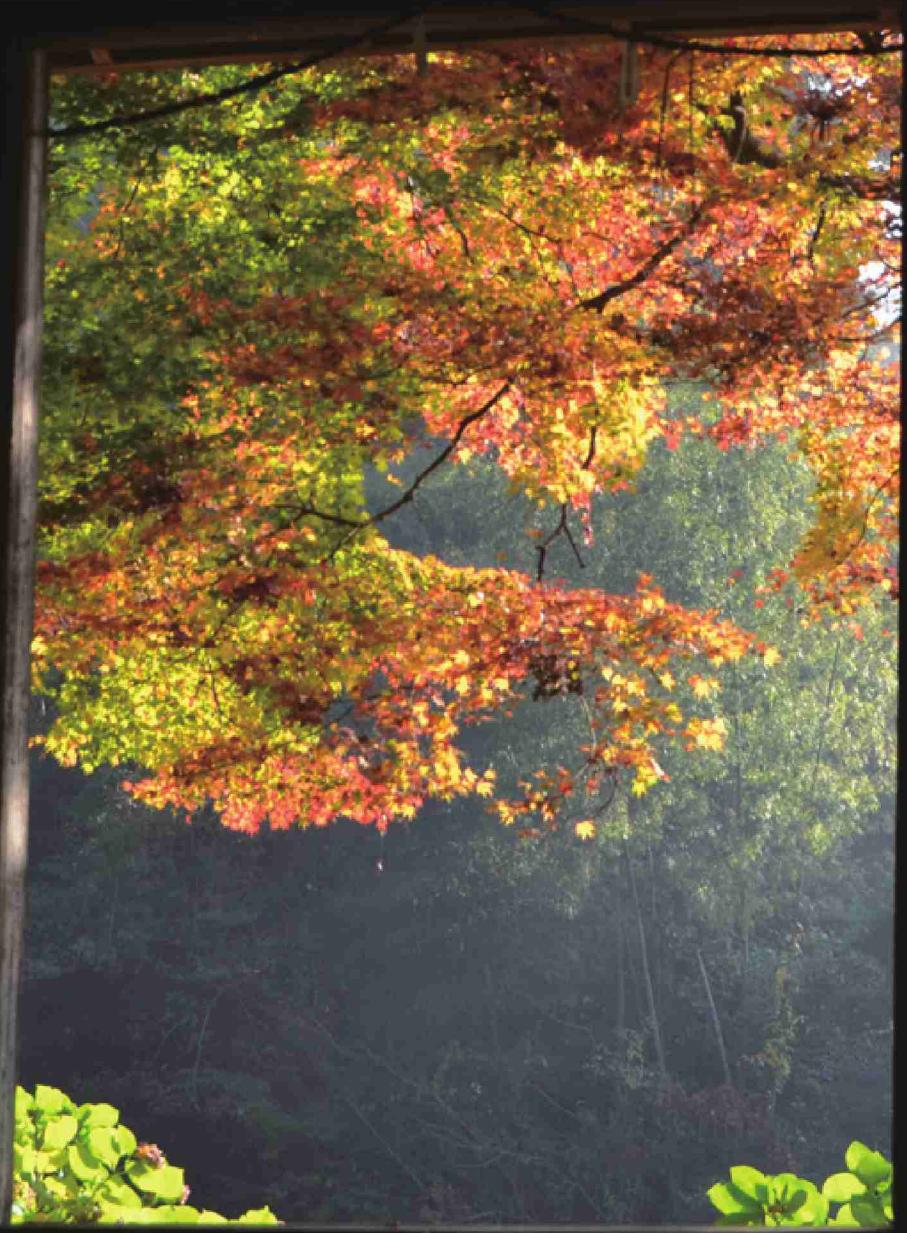
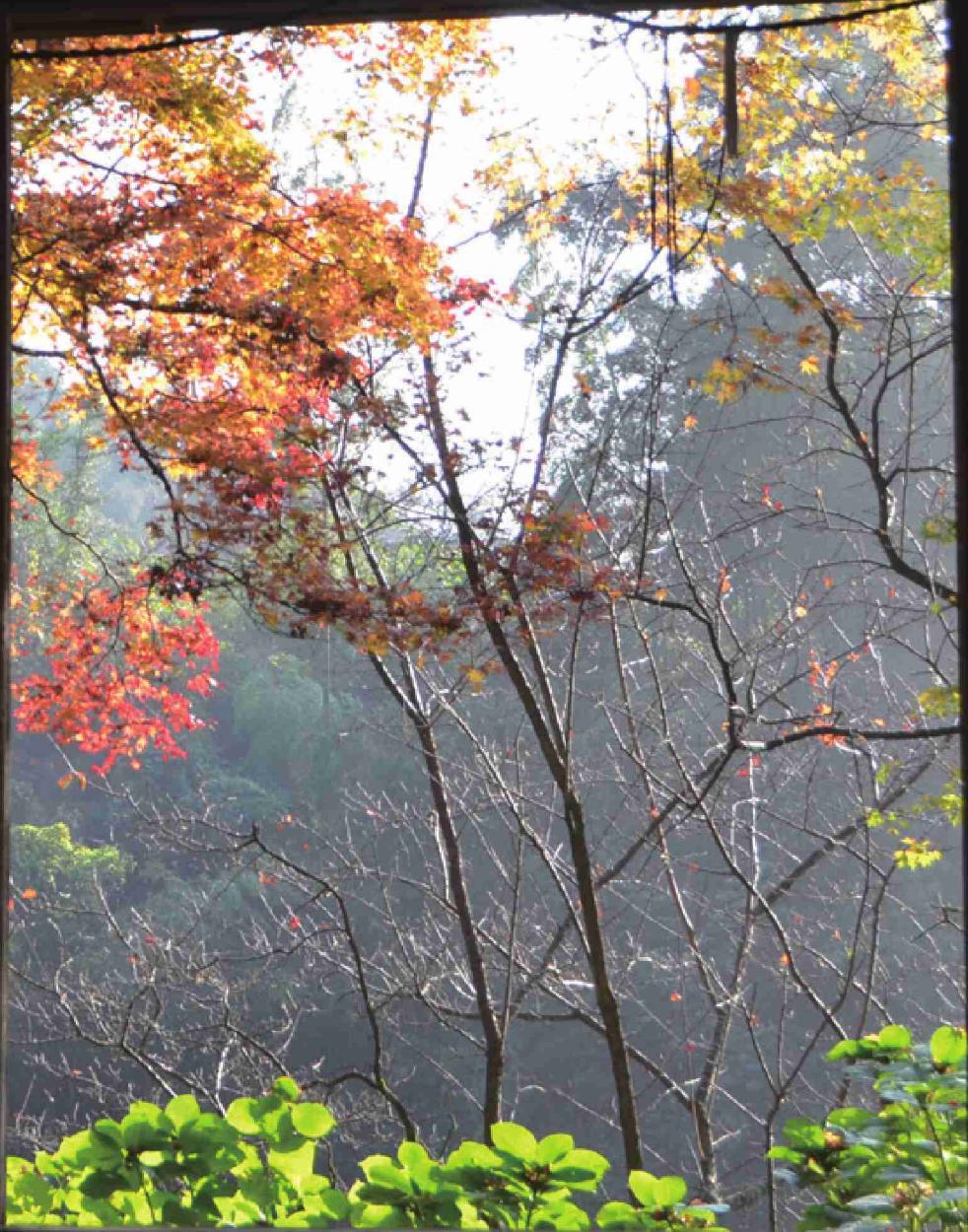
「藍が甕の中で発酵している。甕の中では、藍はバクテリアの力で還元され、透明感のある赤茶色になっています。そこに糸を入れ、引き上げて絞ることで酸化して藍色になる。」そう言つて藍の建て方から私たちに教えてくれたのは、国指定重要無形文化財久留米紺の技術保持者会会員の山村省二さん。

山村さんは、重要無形文化財の技法(手括り、正藍染、手織)に沿つて、全ての工程を手作業で行つている。手仕事の良さを教えてくれる一方

で、「機械織りの紺は量産がきくので、手に取りやすく、久留米紺全体の間口を広げる役割を果たしてくれている。」ともおっしゃっていた。

ただ、それだけでは技術の継承が難しい。伝統的な技法を守っている商品も使つていただくことで、両方が産業としてなりたつているのが久留米紺。汎用性もあるので着物はもちろん、洋服などへも展開が可能、お手入れにも気を使わなくていいそうです。機屋さんによつては洋服に特化しているところもあるそ。





町外のみなさまに広川町の事を知つて  
いただきつかけになればと始めた今回の  
フォトブック制作。

いろいろな方からお写真をお預かりし、  
中には取材に協力いただいた方もいらっ  
しゃいました。

「有名な観光名所はこれといつてあります  
せん(笑)。」と話される町の方々、

だけど脈々と受けつがれるものに目を向  
けると、耳を傾けるとなんだかほっこり  
と笑顔になれる。

これからもゆづくりと糸を紡ぐように伝  
えられていくもの。

あえて人に言つほどのことではないけれど、  
町に住む人が知つている広川町の魅力を  
住んでいる人にも、そうでない人にも、  
今回のフォトブックで少しでもお伝えで  
きていたら嬉しいです。

そして、これをきっかけに、  
「行ってみようかな」

と思つてもらえたたら凄く嬉しいです。

本当にありがとうございました。  
ご協力いただいたみなさま